

休憩 正午より一時迄

四 講 演

(1) 國民的理想

熊本第五高等學校教授
文學士

江部 淳 夫氏

(2) 日本經濟上に於ける女子の地位

神戸高等商業學校教授
法學士

津村 秀 松氏

(3) 世界戰亂と平和運動

東京文科大學教授
文學士

建部 遜 吾氏

休憩 三時卅五分より四十分迄

(4) 民族と國民と世界文化

京都文科大學教授
文學士

坂口 昂氏

(5) 日米關係問題

京都法科大學學長
法學士

神戸 正 雄氏

(6) 都市計畫に就いて

大阪市助役
法學士

關 一 氏

五 討 議

質問者

京都法科大學教授
法學士

佐藤 丑次郎氏

應答者

京都法文科大學講師

米田 庄太郎氏

質問者

京都工科大学教授
工學士

青柳 榮 司氏

應答者

廣島高等師範學校教授
文學士

新見 吉 治氏

六 閉會の辭

東京文科大學教授 建部 遜 吾氏
文學士

此の日朝來の雨を冒して、聽衆堂に充つ。午後七時閉會す。
同七時半より學生集會所に於て會員の晚餐會を催し、宴後明年開會の豫定なる第六回大會開催地、研究宿題、委員選定等の議事ありて。九時散會す。

新著紹介

聖書の話

宮川 巳 作著

凡そ讀書子に三種類ある。内心よりの要求の燃ゆる焔と鋭い理解力の槍とを持つて書籍の内容を征服し同化して行く智的戰士と、理解力は或程度迄あるが内心の要求は左程迄も強くない智的戰士とそれから燃ゆる如き内心要求の焔を有しはするが理解力に乏しい智的貧民とがそれである。而て此智的戰士に、豊富なる領土や糧食を提供し得る者には固より、又一般智的貧民を賑はさんとの目的より企てられた著書にも、多大の價值がある事の多いのは言ふ迄も無い。只獨り智的遊民のデイレックタント風な智的好奇心を單に満足せしめるに留まつて斯くの如き遊民を馳つて智的戰士に變ずる足るだけの靈性も缺けば、又去りとして智的貧民の讀むには稍々難解詳密に過ぎ、智的戰士の之を手にするには嚴密さや深さや熱誠を缺く書——殊に其題材が神祕的なる者を本質とする如きものに至つては私は餘り之を歓迎したく無い一人である。其は智的遊民に對する一種の智的藝妓の役目をするものに過ぎないから

である。固より藝妓も時には便利なる事のある如くかゝる著書も時には——例へば智的遊民が智的戰士になり初めた時の如きには——相當の價値を發揮しはするが多くの場合價値があり相に見え乍らそんなに尊いものではない。それはあつてもよいがあらねばならぬものでは決してない。宮川氏の「聖書の話」の序文を讀んだ時私は恐らくそれは一般智的貧民を賑はさんとするの書であらう、若し然らずんば少くとも智的遊民を馳つて智的戰士に變ぜしめるに足るだけの精氣がある書であらうと思つて、ことに聖書に關しては新らしい自由な現代の因はれざる精神を以てせうした目的を以て書かれた書の少ない日本に於て斯る書の表はれた事に對して多大の喜を以て頁を繰つて行つた。然し私はどこ迄進んで行ても遂に聖書に於ける諸々の書の著者に關する考證や聖書に記載された事實の歴史的價値や諸書の眞偽や記述の異同やなどを智的貧民に取つては詳密に過ぎ智的戰士に取つては嚴密を缺くの程度を以て叙述してあるに過ぎず智的遊民の智的好奇心を單に満足せしめるに過ぎない著者であるのを發見して私は失望したのである。其態度の或程度迄科學的であり批判的である事は題材が題材であるだけ大に多とするに足るが斯くの如き書に關してかゝる「下より」の叙述を——固より専門家を相手とするもつと嚴密なる純史的研究ならば其自身として價値はありはするが斯くの如きの程度に留め且つ一般讀者を對象とし乍ら——平々坦々と進ぶに留めて其考證批判と共に次の奥に隠れたるもつと深くして微妙なる靈氣の發揚に觸るゝ事の甚しく淺かつたのは此上無き遺憾である。單なる歴史に於ても猶事實の考證や異同の辨別に留まらず其間に

呼吸してゐる精神の息吹を書き分ける事が肝要であるのに殊に聖書の如きものに關して(固より單調な、安價な感激に充ちた傍點の煩はしく打つてある文字だけはありはするが)殆どそしうた内奥のものに觸るゝ事の少なかつたのはどうしたわけであらうか。さればこそ豫言者の本性に關する解説などにも文字の表面に因はれた淺い解釋を施すに留まり、單に豫言者^{プロフェト}と云ふ語の歴史的起原が亞拉比亞語の「宣言」と言ふ意味に存して未來を語ると云ふ意味ではないと言ふ根據よりして偉人は聽てイブセンの言つた様に常に本質的に無意識に「未來に接して立つ」もので従つてニイチエがシヨペンハウエルの著書を以て己の爲めに書かれたものだとした様に福音書の記者がキリストの或行爲を以て舊約書中に記された豫言の完成なりとした深い微妙な心理状態なども、殆ど透徹した理解なしに論じ去るに至つたのである。メシア出言の豫言などに關してもクローノ・フイツジャーの近世哲學史序論に見る様な深い解釋は其影さへも見出す事は出来なない。其上歴史的考證の行き方にも随分思ひ切つた點も屢々ある。此書の長所は靈性の貧しいにも係らず筆の上に彈力と潤ひのある事と明快な事と秩序的なると實證的である事とであらう。繰返して言ふ、此書はあつても悪い書では無いがあらねばならぬ書と爲るにはもう少し嚴密なるか靈性を加へるか若しくはもつと通俗簡單になるべきかであらう。(岩波書店發行 定價一圓二十錢)(岡本春彦)

寄贈雜誌

哲學雜誌、思潮、丁酉倫理講演集、心理研究、東西之光、早稻田